

## 小樽祝津エコツアーレポート 202102141713~14

日の出前の早朝 6 時にパノラマ展望台からトド岩に上陸しているトドを観察するが、残念なことにはずれ！しかし、近くの水面に 10 頭ほどの群れを発見、早速漁港に下り康栄丸の船長やすさんのところに直行。タイミングよくニシンの網上げから帰港したばかり。水揚げは何とゼロ、一匹もかかっていなかったとのこと。1 月下旬から始まったニシン漁はここ祝津から浜益までは不良が続いてきた。トドは昔からニシンが大好きなのでニシンが来なければ回遊数も少ない。例年はトド岩に 150~200 頭のトドが集まってくるが今年はまだ少ない日が続いている。そばにいたハンター S に聞いたところ、今朝、トドを撃ってきたとのこと。上陸中のトドはびっくりして水中に逃避したらしい。「行ってみるかい？」船長のお誘いで Sさんと一緒に船に同乗する。島の周りにはトドは見当たらないが、少し西方面の回遊ルートに 3 キロほど探しに行くが見当たらない。あきらめて戻る途中、群れを発見！船を微速にして徐々に近づき水中から頭を出すと思われる水面に狙いを定めて発砲のタイミングを計る。「バーン！」1 発発射するが外れ。ライフル弾の音は近くで聞くとびっくりするほどの轟音である。その後トドたちは船から 1 キロほど離れたところに逃避したため、帰港した。

2 日目は駆除前に出港することにした。14 日 6 時この日もトド岩にはトドが上陸していない。一度撃たれたら怖がって数日は上がらない。ハンター Sさんと一緒に駆除船に乗り 7 時に出港した。この日、駆除船は 2 隻である。トド岩周辺に群れがいた。50m 以上は近づけないが、ブル（雄成獣で体重 1 トン、体長 3 m の個体もある）が 2 頭岩礁の水路に入り込んだ。もう一隻の駆除船と挟み撃ち状態になるが向かい合わせのため撃つことができない。あきらめてすぐ近くの岩礁に上陸中のゴマフアザラシの撮影に切り替えた。上陸と水面遊泳が 8~10 頭ほど確認。そのうちの 1 頭は頭にケガをしていた。撮影を終えて帰港後すぐにニシンの網上げに同乗、ハンター Sさんもライフルを持って乗船。トドは網にかかったニシンを食べ、その時に漁具に被害を与えることになる。

その様子を近くで観察したい。海は穏やかで 20 分ほどで漁場に到着、トドは全く近くに見当たらない。途中、近くで網を巻いていた仲間の漁師さんの話では、少ししかかかっていないとのこと。やすさんが網を巻き始めて間もなく、次々とニシンが上がってくる。かかったばかりで生きており、光に反射した銀色の魚体が跳ねている。今年初の大漁！笑顔と歓喜を乗せて帰港する。すぐに番屋で外し作業が開始される。お手伝いを奥さんに申し出てみると、大歓迎。初めての作業なので初めは思うようには外れない。細い網糸が口と鰓に絡んでおり、魚体全体も糸に複雑に包まれている。しかもニシンのウロコがヌルヌルのために手が滑る。ニシンを外しながら網を整えながら籠に入れてゆく、一定の間隔でついているおもりを外しておく。ニシンは六等級に分けて発泡ケースに詰め込み出荷の準備をする。厳寒での一連の作業は都会の人には信じられないほど厳しい仕事である。普通の人には 3 日も続かないと思う。ニシン漁で使う漁具は刺し網で弱く切れやすい。トドが魚を啜って引っ張ると大き

な穴が開き、修理にはかなりのお金と時間がかかる。トドによる被害に対して行政は補償をしないため漁業者は泣き寝入りで駆除するだけである。沿岸で生業している漁師さんとトドたちが安心して暮らして行ける仕組みが出来ることを願います。

ここからは私のつぶやきです。

駆除数の統計を取り始めた 1958 年以来、効果について検証されたことがないのは不思議なことである。根本的な問題は、公表されている駆除数が真実ではないということ。40 年にわたって水中、水面、岸に打ち上げられた駆除個体を見てきたが、それは統計にはカウントされていない。1994 年以降は撃たれて逃避、傷害、海没をゼロとしている。すべて回収したこととして扱っている。しかし、複数のハンターさんからの聞き取りで、ほとんどが海没してしまうため回収は出来ないらしい。回収できた個体は、水産試験場の担当者が立ち合いの上、頭、胃、生殖器、脂肪など大学の研究者に引き渡される。どんな目的で研究し、被害軽減に寄与出来ているのかよくわからない。残った肉は缶詰工場と全国のジビエ料理店に流通業者を通じて送られる。トドは水産資源として水産庁が管理主体となっているため、鳥獣保護法改正の際に外された。水産資源であるならばクジラと同様に漁獲統計に載らないのは不思議なことである。レッドリストのトドを水産資源として扱うことは世界の潮流に逆行することになるのでわからないわけではない。海の食料資源が獲り尽くされようとしていることは明らかである。トドを資源として扱う可能性が 2 つあると思う。一つは食肉資源として、もう一つに観光資源としてである。トドウォッチングダイブ&クルーズで世界から野生動物写真家や環境保全志向の人たちが集まることになる。人の生活圏に回遊してくるトドは貴重な観光資源である。巨獣であるにもかかわらず、性格は平和的で好奇心が強いこと、人に危害を与えないことは一般の人たちにはあまり知られていない。野生トドを直接目の前にして感じることは何か？被害とは何か、人は今も自然の成り立ちに寄与しているのか、環境の定義とは。「海が先生」だとあらためて痛感しますね。

Sealionsclub ふじたひさお